

『クィーン・マブ』における善と悪

櫻井和美

要 旨

本稿は、P.B.シェリーが『クィーン・マブ』において表現した善と悪の性質について考察している。

善に関しては、『クィーン・マブ』に登場する『『自然』の魂』に注目する。シェリーによると、この「魂」は、善と悪という対立物の共在としての神に似た存在である。さらにシェリーは『『自然』の魂』を「必然」と言い換えることによって、決定論的色彩の濃い神のイメージを与えている。しかしシェリーは「我々は、『必然』の教義によって、これらの語句を適用する出来事が我々自身の特有の存在形態に関係しているものでなければ、世界には善も悪もないと教えられている」と語っている。『『自然』の魂』は固有の法則性を持って動く神に相当する存在ではあるものの、善悪はあくまでも人間の基準で判断されたものであり、『クィーン・マブ』での『『自然』の魂』は中立的存在として描かれている。

悪に関しては、『クィーン・マブ』には二つの立場が混在している。シェリーは『『魂』のみが唯一の要素だ』と語っている。シェリーは物質が悪だと主張することによって、世界に悪が実存することを認めているものの、悪を存在論上からは否定している。しかしその一方で、『『自然』の魂』は「愛と憎の世界を／理解する」とも表現する。このとき善と悪は「魂」自身に存在することになり、存在論上から肯定してしまっている。

善悪という観点から『『自然』の魂』を捉えると、そこには多くの矛盾がある。『クィーン・マブ』は善と悪についての答えを暗中模索していた時期の作品であったと考えられる。

キーワード：『『自然』の魂』、善、「必然」、悪、存在論

1.

『クィーン・マブ——哲学詩、及び注』（*Queen Mab; A Philosophical Poem: With Notes*, 1813年）はシェリー（Percy Bysshe Shelley, 1792-1822）が20歳の頃に書いた詩¹⁾である。この詩は献詩（16行）と本詩（全9章・2289行）と注釈（全7項目）で構成されていて、彼のいくつかの長編詩の最初のものとして知られている。

本詩の内容はいたって明瞭である。天上に住む妖精の女王マブが、地上の女性アイアンシーのもとに赴く。そしてマブは眠っているアイアンシーの魂を呼び起こし、天の魔法の宮殿へと連れていく。その魔法の宮殿で、マブはアイアンシーに地球上で過去・現在に起こった人間の愚行の様子と、未来の刷新された様子を見せる。そして過去・現在からの教訓と社会の刷新方法を教えられたアイアンシーが、社会の改革者としての資質を身に付け、再び地上に眠る自分の肉体へと戻っていくというストーリーになっている。

では、この『クィーン・マブ』においてシェリーは何を意図していたのであろうか？ シェリーは1812年2月24日付けのゴドウィン（William Godwin, 1756-1836）に宛てた手紙の中で、

次のように書いている。「私は美德に資するもののみを出版しよう。従って、今後私が出版するものは、それがいやすくも他に影響を与えるとすれば、必ずや善に対して影響を与えよう」(Vol. VIII, 280)²⁾。『クィーン・マブ』はこの手紙が書かれた後に執筆が始まり、翌年に出版されたという時間的な点から見ると³⁾、人々を善に導こうとする道徳的立場から執筆していたと考えられる。

この推測は本詩の構成面に顕著に現れている。全9章から成る本詩の内容を区分すると、導入(第1章から第2章108行目まで)、過去の過誤(第2章109行目から第3章13行目まで)、現在の過誤(第3章14行目から第7章まで)、未来の理想的社会像(第8章から第9章137行目まで)、結末(第9章138行目から240行目まで)となっている。このような過去・現在・未来の様子は、全体の割合で考えると、過去が7%、現在が55%、未来が16%となる。この描写の割合に注目した場合、過去と現在の過誤の様子が全体の62%を、また未来の理想像が16%を占めている。これらは、その割合だけから判断しても、当時のシェリーがいかに人間の善性に対する強い願望を持っていたか、その反面で彼の願望とは対照的に、いかに社会状況を悪と捉えていたかが伺える。

そこで本稿では、シェリーが『クィーン・マブ』において表現した善と悪の性質についてそれぞれ見ていくことにする。

2. 善

『クィーン・マブ』では、理想的な社会は、自然と人間の相互作用によって完成すると歌われている。

How sweet a scene will earth become!
Of purest spirits, a pure dwelling-place,
Symphonious with the planetary spheres;
When man, with changeless nature coalescing,
Will undertake regeneration's work,
When its ungenial poles no longer point
To the red and baleful sun
That faintly twinkles there. (VI. 39-46 / Vol. I, 106)

マブはアイアンシーに過去と現在の人間の愚行を見せながら、時折その合間に「自然」⁴⁾ ('nature') の美しい描写をはさんでいる。この「自然」の描写は、過去と現在の人間が犯した罪を見て落胆するアイアンシーへの慰めであると同時に、理想的な未来が実現することへの希

望を与えている。そのうちの一編である上の一節では、人間が「不変なる自然」(‘changeless nature’)と互いに助け合うとき、また地球の地軸の傾きが失われたとき、地上は「純粋な住家」(‘a pure dwelling-place’)になるであろうと語られている。この一節にはさらにシェリー自身の注が付いている。それによると、「北極星は、現在の傾斜の状態においては、地球の軸を指し示している。はなはだ恐らく、多くの考察からして、この傾斜は次第に減少し、遂には赤道が黄道と一致するであろう。その時、地上では夜と昼は一年を通じて等しいものとなり、恐らく季節もまた同様となろう。両極が垂直になっていく進行の速度は知性の進行と同じくらいであるかもしれない、あるいはまた人間の精神的向上と肉体的向上とが完全に一致すべきだと考えることは、ひどくとっぴなものではない」(Vol. I, 143)となっている。注において、シェリーは地軸の傾きや季節などの自然界の状態が人間に影響を及ぼすと考えている。シェリーのこの説明をマブの言葉に合わせると、善に満ちた社会の形成には、「自然」の積極的な関与が必要であることになる。

そこで、本詩に描かれている「自然」に注目してみたい。

Hath Nature's soul,
That formed this world so beautiful, that spread
Earth's lap with plenty, and life's smallest chord
Strung to unchanging unison, that gave
The happy birds their dwelling in the grove,
That yielded to the wanderers of the deep
The lovely silence of the unfathomed main,
And filled the meanest worm that crawls in dust
With spirit, thought, and love; on Man alone,
Partial in causeless malice, wantonly
Heaped ruin, vice, and slavery; his soul
Blasted with withering curses; placed afar
The meteor-happiness, that shuns his grasp,
But serving on the frightful gulf to glare,
Rent wide beneath his footsteps?

Nature! — no! (IV. 89-104 / Vol. I, 92-93)

この引用では、『『自然』の魂』(‘Nature's soul’)が地上に与えているものを羅列している。それによると、「魂」は世界に豊饒をもたらし、鳥には住家を、魚には海の恩恵を、卑しき虫け

らにさえも生气と思想と愛を与えている。さらにその「魂」は地上を破壊する人間にすら、他の動物たち同様に思想や愛といった恩恵を惜しみなく与えていると言う。こうした描写は、『自然』の魂が世界の創造神で、万物に実りや調和、愛や思想を与える善なる神の姿を想起させる。

では、上記の『自然』の魂とはどのような存在なのであろうか？ シェリーは注の中で、「この〔神 (God) の〕否定は、単に創造的な『神』(‘Deity’) に影響を及ぼすものに過ぎないと理解しなければならない。世界に永遠に遍在する『精霊』の仮説は、依然として確固たるものである」(Vol. I, 146) と書いている。シェリーは宗教上の神 (God) については否定しているが、世界に遍在する精霊、すなわち『自然』の魂への信仰は揺るぎないと述べ、『自然』の魂を神的存在に匹敵するものとして描いている。

一般的に、世界の宗教は一元論的な神と、二元論的な神を信仰する宗教に大別される。一元論的傾向を持つ宗教としては、例えば、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教（主に旧約聖書に代表されるキリスト教）などが挙げられる。旧約聖書の「創世記」では、「初めに、神は天地を創造された」(1・1) とあり、神が森羅万象に先立つ創造主であることが記されている⁵⁾。この神は、善悪の観点から見た場合、唯一神で、宇宙全体に対して全責任を持つ神、時に建設的なものにして、時に破壊的なものであるという対立物の共在としての神である⁶⁾。極端な二元論的傾向を持つ宗教としては、例えば、ゾロアスター教やマニ教などが挙げられる⁷⁾。この宗教下では、善なる神は善しか行わずがなく、この世に悪をもたらすことは決してない。悪は悪なる神によって創造されたと考えられている。

本詩において、『自然』の魂は「必然」(‘Necessity’) という名でも言い換えられている。

Spirit of Nature! all-sufficing Power,

Necessity! thou mother of the world! (VI. 197-198 / Vol. I, 111)

「自然の大霊」(‘Spirit of Nature’), すなわち『自然』の魂は唯物論的色彩の濃い「必然」の別名を持っている。この「必然」の導入は、とりわけ18世紀の思想家ゴドウィンの『政治的正義』(*Political Justice*), フランスの唯物論者ドルバック (Paul Heinrich Dietrich Baron d'Holbach, 1723-1789) の『自然の体系』(*Systeme de la Nature*), ヒューム (David Hume, 1711-1776) の『人間悟性論』(*An Inquiry Concerning Human Understanding*) に学んだ結果だ⁸⁾ と指摘されている。特に本詩の「かように猛威を奮えし原子のどれ一つとて／定めなく必要なく作用するものはなく、／すべてはひたすら必然のままに働いているのだ」(VI. 171-173 / Vol. I, 110) に付けた注では、ドルバックの『自然の体系』を原文のまま引用するほか、「神なんぞ実在せぬ！」(VII. 13 / Vol. I, 112) の詩行においても、神の存在の証明にドルバックの原文を数ページに渡って引用している。このことから、当時のシェリーが唯物論者の思想に影響を

受けていたことは想像に難くない。すると、『『自然』の魂』は唯物論を想起させる「必然」の概念を導入したことによって、決定論上の神のイメージを持つことになる。決定論の世界観では、万物の意志は因果の必然に縛られているので、自分の意志を自由に決定することはできず、その世界観の下ではすべてはあらかじめ決定されている⁹⁾。言い換えれば、すべては存在する前から善は善に、悪は悪に決定されていて、その決定権は神に帰している。すなわち『『自然』の魂』は、善と悪の両方を兼ね備えた一元論的神の面影を持っていることになる。

そこで『『自然』の魂』の決定論的立場を吟味するために、決定論とは相容れない自由意志という視点から考え直してみたい。

I tell thee that those viewless beings,
Whose mansion is the smallest particle
Of the impassive atmosphere,
Think, feel and live like man;
That their affections and antipathies,
Like his, produce the laws
Ruling their moral state;
And the minutest throb
That through their frame diffuses
The slightest, faintest motion,
Is fixed and indispensable
As the majestic laws
That rule yon rolling orbs. (II. 231-243 / Vol. I, 81-82)

この一節に関して、キング・ヒーリィ (Desmond King-Hele) は、最小の粒子の一つ一つがある一定の自由意志を働かせながら、しかも依然として自然の法則にも従っている¹⁰⁾ ことを指摘している。『クィーン・マブ』の第5章においては、『『自然』は、寛大に公平に、万物を征服する／意志を人間に授けた』(V. 132-133 / Vol. I, 101) と言っていることから考えても、ある程度は人間に選択する意志が与えられている。キング・ヒーリィがシェリーは自由意志の問題に立ち入ったにもかかわらず、当時のシェリーは一度もそれをはっきりさせなかった¹¹⁾ と指摘しているように、シェリーは一方で『『自然』の魂』の決定論的立場を主張しながら、他方で神の善性を認め、善悪を自由意志の問題に委ねるという矛盾した状態の中にいる。

シェリーはこの『『自然』の魂』の相反する性質について、『『必然』よ！御身、世界の母よ！』(VI. 198 / Vol. I, 111) の詩行に注を施し、「必然」について次のような説明を加えている。それによると、「我々は、『必然』の教義によって、これらの語句を適用する出来事が我々

自身の特有の存在形態に関係しているのでなければ、世界には善も悪もないと教えられている」(Vol. I, 146)。つまり、「必然」という言葉が『『自然』の魂』と同一のものとして用いられる限り、「魂」自身は善や悪といった価値判断を下すことがない。善悪は人間の判断によって決まるに過ぎない。

本詩の中では、『『自然』の魂』は『『必然』よ！御身、世界の母よ！』と呼ばけられた後、次のように語られている。

Unlike the God of human error, thou
 Requirest no prayers or praises; the caprice
 Of man's weak will belongs no more to thee
 Than do the changeful passions of his breast
 To thy unvarying harmony: (VI. 199–203 / Vol. I, 111)

ここでシェリーは、自らの掟によって動いている『『自然』の魂』と、人間との関係を否定している。『『自然』の魂』は固有の法則性をもって動く。それはときに人間に善を、ときに悪をもたらす。しかしその基準はあくまでも人間の判断に過ぎぬものであり、「魂」自身は中立的な存在として描かれている。

従って、シェリーは『『自然』の魂』が人間を善に導く根源として描き、その「魂」との調和を説いた。しかし『『自然』の魂』自身は中立的立場を保って動く宇宙の支配者に過ぎず、一見善性を帯びたその支配者は、人間の基準で善として判断されたものでしかなかった。

3. 悪

次に、『クィーン・マブ』に描かれた悪について見てみたい。1. で見たように、本詩の構成割合は過去（7%）・現在（55%）の過誤の描写が全体の62%となり、特にその中でも現在の描写が大半を占めていた。『クィーン・マブ』においては、シェリーは過去・現在を人間の過誤の歴史の蓄積と捉え、それをマブに語らせる口調は激しい。そこでシェリーが非難する人間の過誤とはどのようなものなのか、本詩の中で最も描写が集中している現在に的を絞って見てみたい。現在の過誤の内訳は、君主政治（第3章）、戦争（第4章）、商業（第5章）、宗教（第6章・第7章）となっている。この項目から判断すると、シェリーは宗教を最も激しく非難していることになる。そこで、宗教に向けられた非難の理由を詳しく見ていくことにする。

本詩の第6章には、マブが宗教史を語る場面がある。マブによると、宗教の形成期は、草木にも、山海にも神が宿るという汎神論的な信仰に基づくものであった。やがて宗教は精霊や亡霊といった姿を生みだし、さらに自然の変化こそが神（God）なのだと言及するに至った。

Awhile thou stoodst

Baffled and gloomy; then thou didst sum up

The elements of all that thou didst know;

.....

And all their causes, to an abstract point,

Converging, thou didst bend, and called it God!

The self-sufficing, the omnipotent,

The merciful, and the avenging God!

Who, prototype of human misrule, sits

High in heaven's realm, upon a golden throne,

Even like an earthly king; (VI. 93-108 / Vol. I, 108)

神 (God) は「十全にして全能、／慈悲と復讐の神だ」と言われている。宗教が作りだした神 (God) は人間に慈悲を与える神であると同時に、人間に復讐する神でもある。この神 (God) の様子は、引用 5)・6) に見た対立物の共在する神、すなわち善と悪の二面を持つ神の姿である。シェリーの非難の矛先は諸宗教が作りだした対立物の共在としての神に向けられていて、そのような神は自然の諸力を語るために発明された名前だったと述べている。さらにその神 (God) は「地上の王」に喩えられている。すなわち宗教上の神 (God) は人間が創造した全能者であり、それは地上の暴君と同等の存在であるに過ぎない。

上の引用で、宗教上の神 (God) が王に喩えられていたように、シェリーが悪として非難するものの共通点は、人間が創造したにもかかわらず、それが全知全能のように振る舞い、殺人までも合法化するところにある。このような『クィーン・マブ』における悪について、ダウデン (Edward Dowden) は「道徳的な浅はかさは、人間の性質の中に存在しているというよりはむしろ、制度や、法律、政府、また一般に良心や意志の外にある事柄に存在しているというような悪の見解から生じている」¹²⁾ と解説している。ダウデンによると、『クィーン・マブ』における悪は「制度や、法律、政府」といった外的要因や、「良心や意志の外にある事柄」といった物質的な要因から生じている。

このようなシェリーの悪の認識は、『クィーン・マブ』における二つの事実から明らかになると思われる。一つはシェリーの伝記的事実にある。『クィーン・マブ』はしばしばゴドウィンの韻文だ¹³⁾ と言われているように、この作品にはゴドウィン思想が色濃く反映されている。そのゴドウィン思想がプラトンの影響下にあった¹⁴⁾ こと、また実際のプラトンの読書は『クィーン・マブ』より少し後になるものの、シェリーがしばしばプラトンに親しんだ詩人であった¹⁵⁾ ことは、シェリーのプラトンへの傾倒を示している。もう一つは『クィーン・マブ』の本詩の一節で、「『魂』のみが唯一の要素だ」(IV. 140 / Vol. I, 94) と語るとき、2. で見たよ

うに『クィーン・マブ』当時のシェリーが唯物論の影響を強く受けていたにもかかわらず、シェリーが物質を排除し、霊的一元論へと向かおうとする傾向があったことを示している。このように考えると、シェリーはプラトン以来の西洋哲学の伝統¹⁶⁾に根ざして実存的な悪を物質と捉え、「悪を善の欠如」として考えていたと思われる。

「悪は善の欠如」であり、物質が悪である。この考え方においては、世界に悪が実在することを認めているが、悪が存在することは積極的には認めていない¹⁷⁾。シェリーは悪が実在することを認めていた。しかしシェリーは本当に「悪を善の欠如」と考え、悪の存在を否定したのであろうか？ 結論から言うと、『クィーン・マブ』には悪を存在論的にも認めようとしていたような言及がある。

Throughout this varied and eternal world
Soul is the only element, the block
That for uncounted ages has remained.
The moveless pillar of a mountain's weight
Is active, living spirit. Every grain
Is sentient both in unity and part,
And the minutest atom comprehends
A world of loves and hatreds; these beget
Evil and good: hence truth and falsehood spring;
Hence will, and thought, and action, all the germs
Of pain or pleasure, sympathy or hate,
That variegate the eternal universe. (IV. 139–150 / Vol. I, 94)

グラボー (Grabo) はこの一節を次のように解釈している。ここに登場する「生き、活動せる精神」(‘active, living spirit’) は2.に見た『『自然』の魂』を意味しているが、それが最後の原子までも活気づけていて、「愛と憎の世界を／理解する」。このとき悪は単に人間の創造物であるはずがなく、魂自身、すなわち『自然』の中に備わっている¹⁸⁾。グラボーの解釈に従って、もしもシェリーが悪は魂の中に宿と考えていたならば、2.で見たように『『自然』の魂』が世界を支配する魂である限り、「悪を善の欠如」としてではなく、完全態としての善と対等の悪、すなわち存在論的立場から悪を認めていることになる。

2.では『『自然』の魂』が中立的存在であることを見た。その場合、善悪は人間の判断基準によって決定された。しかし上のグラボーの意見に従って「魂」の中に善悪が宿とするならば、『『自然』の魂』は中立的立場を保つことができない。上の引用でのマブは『『自然』の魂』が「愛と憎の世界を／理解する」と述べたものの、第6章ではその言葉と矛盾する台詞を言

う。

No love, no hate thou cherishest; revenge
 And favouritism, and worst desire of fame
 Thou knowest not: all that the wide world contains
 Are but thy passive instruments, and thou
 Regardst them all with an impartial eye
 Whose joy or pain thy nature cannot feel,
 Because thou hast not human sense,
 Because thou art not human mind. (VI. 212-219 / Vol. I, 111)

この一節では、『『自然』の魂』は「愛も憎も抱かない」や、「喜びも苦しみも感じない」と表現されている。それは『『自然』の魂』が人間の感覚や精神を持たないためである。これは2. で見たように『『自然』の魂』が中立的存在で、善悪の判断が人間に委ねられているという点からは納得がいく。しかしこの説明は、前の引用での『『自然』の魂』が「愛と憎の世界を／理解する」とは相容れない台詞であることも明らかである。

『クィーン・マブ』当時のシェリーは、悪が王制や制度や法律や宗教などさまざまな形でこの世に実在することを認めていた。しかし悪の存在の是非を突き止めようとするとき、当時のシェリーは悪を存在論的に否定する立場と、肯定しようとする立場のいずれをも受け入れてしまっていたようである。

4.

最後に『クィーン・マブ』に見られる善悪観をまとめておきたい。

善に関しては、シェリーは宗教上の神と対等の存在として『『自然』の魂』を用意した。しかし宗教上の神が対立物の共在であったのに対して、『『自然』の魂』は中立的立場を保とうとしていた。『クィーン・マブ』での善は、そのような「魂」と人間が共に助け合うときに実現するものであった。この意味では、善に対する三種類の考え方¹⁹⁾と異なり、善に導く存在に中立的立場を持たせたところにシェリーの独自性があったと考えられる。

悪に関しては、王や制度や宗教など人間が創造した外的要因から生じるということであった。シェリーが悪を外的要因に見いだすとき、悪はこの世に実在するものと考えている。そしてその悪の原因を追究したとき、シェリーは「魂」の中に悪が宿るか否かの選択に迫られ、両方ともを受け入れてしまった。つまり、「悪を善の欠如」と見做して存在論的に否定する西洋哲学上の考え方と、「悪が霊の過程から存在している」と見做して存在論上から肯定する二

元論の考え方の両者を受け入れてしまったものと考えられる。『クィーン・マブ』執筆当時のシェリーは、悪の存在に対する答えをまだ見つけることができていない。

注

- 1) P. B. Shelley, "To the Editor of 'the Examiner'", June 22, 1821., Letter 533, *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley*, Eds. Roger Ingpen and Walter E. Peck, Vol. X (New York: Gordian Press, 1965) 280.
 シェリーは『エグザミナー』誌宛ての手紙で、『クィーン・マブ』は18歳のときに書いたものであると言っている。しかし1813年2月19日付けの手紙に '*Queen Mab* is finished and transcribed. I am now preparing the Notes which shall be long and philosophical.' (Vol. IX, 47) とあり、シェリーが1792年8月4日に生まれたことから計算すると、『クィーン・マブ』は実際には20歳頃に書かれた作品であることになる。
- 2) シェリーからの引用は、P. B. Shelley, *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley*, Eds. Roger Ingpen and Walter E. Peck, Vols. I-X (New York: Gordian Press, 1965) による。なお文末の括弧内の数字については、スラッシュがある場合には、前が幕と行数を、後ろが巻数とページ数を示している。スラッシュがない場合は、巻数とページ数を示している。
- 3) P. B. Shelley, "To Thomas Hookham", August 18, 1812., Letter 187, Vol. IX, 19.
 シェリーは上記の手紙において、'I conceive I have matter enough for 6 more cantos. You will perceive that I have no attempted to temper my constitutional enthusiasm in that Poem.' と書き、この時期までには『クィーン・マブ』の本詩部分の大半が完成していたことを告げている。
 さらに上記の注1) に見たように、1813年2月19日には『クィーン・マブ』が清書を終えて、注を用意していた。そしてキャメロンによると、1813年5月頃に印刷された。Cf. Kenneth Neil Cameron, *The Young Shelley: Genesis of a Radical* (New York: Macmillan Company, 1950) 480-481.
- 4) 本論中の『クィーン・マブ』本詩の邦訳は、高橋規矩訳『クィーン・マブ——革命の哲学詩——』（文化評論出版、1972年）を使用させて頂いた。
- 5) 久米博、『キリスト教——その思想と歴史』（新曜社、1993年）27.
- 6) ジェフリー・B・ラッセル、『悪魔の系譜』（青土社、1990年）53.
- 7) ジェフリー・B・ラッセル、『悪魔の系譜』, 37.
- 8) Carlos Baker, *Shelley's Major Poetry: The Fabric of a Vision* (New Jersey: Princeton University Press, 1966) 33.
- 9) 上記をまとめるにあたり、山崎正一、市川浩編、『現代哲学事典』（講談社現代新書、1970年）209-211を参考にさせて頂いた。
- 10) Desmond King-Hele, *Shelley: His Thought and Work* (London: Macmillan Press, 1960) 38.
- 11) King-Hele, *Shelley: His Thought and Work*, 37.
- 12) Edward Dowden, *The Life of Percy Bysshe Shelley*, Vol. I (London: Kegan Paul, Trench & Co., 1886) 342.
- 13) H. N. Brailsford, *Shelley, Godwin, and Their Circle* (London: William and Norgate, 1913) 218.
 Carl Grapo, *The Magic Plant: The Growth of Shelley's Thought* (Chapel Hill: The Univeresity of North Carolina Press, 1936) 109.
- 14) Brailsford, *Shelley, Godwin, and Their Circle*, 217-218.
- 15) Mary Shelley, *Mary Shelley's Journal*, ed. Frederick L. Jones (Norman: University of Oklahoma Press, 1947) 90.
 Mary Shelley の日記によると、シェリーのプラトンの読書は1817年以降に現れてくる。
 P. B. Shelley, *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley*, Eds. Roger Ingpen and Walter E. Peck, Vol. VII.
 シェリーは1818年にはプラトンの『饗宴』を翻訳し、部分的なプラトンの翻訳として『イオン』や『国家』が残っている。
- 16) 岡田明憲、『ゾロアスターの神秘思想』（講談社現代新書、1988年）56-57, 71.
- 17) ジェフリー・B・ラッセル、『悪魔の系譜』, 48.

上記には、「プラトン主義者たちは世界に道徳的な悪が存在しないと主張することはなかった。悪は存在するが、善の欠如として存在する。プラトンは悪という非存在が世界から悪を取り除くとは考えず、造物主から悪の責任を取り除くとのみ考えた。悪は神からではなく物質から生じた」ことが記されている。

18) Grabo, *The Magic Plant: The Growth of Shelley's Thought*, 110.

19) ジェフリー・B・ラッセルの『悪魔の系譜』によると、歴史的に見ると、善悪は下の三種類に大別されている。

1. 神は善と悪の二つの顔を備えている。すなわち、神は対立物の共存である。(p. 22)
2. 神は善である。しかしその神の絶対的な力には何らかの制限、または限界がある。その制限の一部が混沌、物質、自由意志など様々な名称で呼ばれ、そこで悪が生みだされる。(p. 109)
3. 善神と悪神の二つの霊的原理が存在し、善神からは善しかもたらされず、悪神からは悪しかもたらされることがない。(pp. 36-38)

Good and Evil in *Queen Mab*

Kazumi SAKURAI

Abstract

I will discuss the idea of good and evil in P. B. Shelley's *Queen Mab*.

There appears 'Nature's soul' in *Queen Mab*. According to Shelley, this soul is similar to God who gives all creatures good and evil. Shelley describes 'Nature's soul' like Almighty God, while he also accepts the idea which doesn't fit determinism. The idea is shown in the lines: 'we are taught, by the doctrine of Necessity, that there is neither good nor evil in the universe, otherwise than as the events to which we apply these epithets have relation to our own peculiar mode of being.' These lines suggest that 'Nature's soul' has its own principle, and that it doesn't give all creatures good and evil.

There are two points of view on evil in *Queen Mab*. The first one is expressed in the line: 'Soul is the only element'. Shelley insists that evil should come from matter. From this point of view, he keeps a monistic position. On the contrary, Shelley says as follows: 'the minutest atom comprehends / A world of loves and hatreds'. These lines suggest that the soul involves good and evil. That is to say, Shelley stands on an ontological position. Shelley accepts two different positions to evil.

Queen Mab has many contradictions. Shelley, who was only 20 years old when he wrote this poem, could not apparently find his answer to good and evil.

Keywords: 'Nature's soul', good, 'Necessity', evil, ontology